

「梯経済哲学」を生かすもの

平井俊彦

一 梯哲学の基本的性格⁽¹⁾

「自分の世界観の解明、社会の発展、ことに現在の状態、この状態のうちにおける自分の態度、こういうことがらを真面目に考えるすべての知識人にとっては、マルクスとの関係ということが真の試金石になるものである。かれがこの問題に対してどこまで真面目であるか、深刻であるかは、かれが現代の世界史的闘争に対する明確な態度を——意識的にせよ、無意識的にせよ——避けようとしているか否か、また、どの程度まで避けようとしているか、それを測る尺度になるものである。」⁽²⁾（傍点引用者）この言葉は、ルカーチが『七十才記念論集』のなかで、長い自己の思想形成を回顧した「思想的自伝」の冒頭の一文である。すでに戦前から今日にいたるまで、一貫してマルクスと対決し、マルクスとともに思索し苦闘してきた数少ないわが国の優れた哲学者に、梯明秀教授がある。梯教授はすでに昭和八年に『資本論』研究に本格的に取り組みましたといわれるから、今年でちょうどまる三十年間、マルクスとともに思想的歩みをはこばれたわけである。⁽³⁾その間、戦前の『資本論』研究は『資本論の弁証法的根拠』に収められ、戦後の研究は『資本論の学問的構造』として世に問われた。この後者のなかの代表的論文「現実的学としての資本論」に、新たに四つの論文を加えられて、先に『ヘーゲル哲学と資本論』を

公にされ、今回、新たに『経済哲学原理』を発表されて、還暦を迎えられたわけである。

わたしはいまここで、こうした長い歴史をもつ梯教授の思想体系をその全体にわたって再現する能力もなければ、その余裕もない。ただここで、もっとも梯哲学の特色をしめしていると思われる最新の労作『経済哲学原理』を中心として、梯哲学を内在的に追求し、日頃わたしが考えている梯哲学のイメージを素直にうかび上げ、そうしてこれにたいして大胆に疑問点を提示してみたい。このことによって、ひごろの教授の学恩にいきさかでも応えることができれば、幸いである。

レーニンは『哲学ノート』のなかで、「マルクスはなるほど『論理学』という書物こそ残さなかったけれども、『資本論』という論理学を残した」と、のべている。出発点からの梯教授の狙いも、またここにあった。『資本論の弁証法的根拠』の序文で、著者はつぎのようにいう。「資本論を単に経済学の古典とみるだけでなく、同時に、論理学の古典としても読むべきであること、これは十数年まえに、わたくしの抱いた信念であり、念願であった。」⁽⁴⁾ここに、「経済学の古典」としてと同時に「論理学の古典」として読むという著者の言葉は、重要であって、これはのちの批判点の一つとなるのである。だが、これはともかくとして、問題をのこし、先へ進もう。

ところで、『資本論』を論理学として読むということは、なにか。単に『資本論』をヘーゲル弁証法の論理で扮飾したり、外的にこれに結びつけて機械的に解釈することではない。弁証法は単なる論理的形式でもなければ、方法的手続きでもなく、それは一つの實在のロゴスであり、それ自体が自己矛盾によって自らを展開する主体的な存在の姿である。「資本論における弁証法は、一つの實在的な論理の世界である。」⁽⁵⁾この点では、弁証法を實在的なものの自己発展の論理とするヘーゲルの方法は、正しく継承さるべきものである。『資本論』をこのよう

に思惟の論理学としてみることは、「資本論における弁証法をば、実在的であると同時に論理的である絶体者が、自己の内容を自発自展せしめる過程であったヘーゲル論理学の弁証法と、同じく理解することを意味するであろう。」⁽⁶⁾だが、マルクスとヘーゲルとは、この実在そのものがちがっている。「この自己展開の主体としての絶体者が、ヘーゲルにおいては精神であったのたいていして、マルクスにおいては物質である。」⁽⁷⁾くわしくいえば、マルクスの実在は、「物質の自己転化に成立する特殊の全体としての資本である。」⁽⁸⁾したがって、『資本論』における弁証法はつぎのようになるだろう。「ヘーゲルの絶体精神がその現象学的な意識の各段階の最後に到達しえた主体であり、この主体の自覚においてかかる実在的な論理の世界が展開せられたごとく、資本論における弁証法も、資本主義社会に内在的な物質的主体の自覚に成立すべき論理の世界であるべきであろう。」⁽⁹⁾とすれば、ここにマルクスがいかにヘーゲル弁証法を批判的に継承したのか、その批判点と継承点が、その連続と非連続とがマルクスの展開に即して確められるはずである。

いうまでもなく、マルクスの主体は、ヘーゲルが精神の外在態としてとらえた自然であり、物質である。だが、自然はそれ自体では矛盾をもち、自己展開するものではない。自然が単なる自然であるかぎり、それは抽象態であり、自然弁証法の世界であろう。自然がそれ自体として主体として自己分裂するのは、自らのうちに人間をうみだし、この人間が自然を土台としながら、それと対立し闘争することによって、はじめて社会となる。これを人間の側からいえば、自然から人間が生まれ、それから独立して、これに働きかけて自己を自覚し確立するとき、はじめその主体性が生まれるのである。マルクスが『経済学・哲学手稿』のなかで、「歴史は人間の真の自然史である」⁽¹⁰⁾とのべているのは、こうした自然の生成を意味している、とわたしはうけとっている。梯教授はマルクスの

論理的主体たる實在をこのように、宇宙史的規模のなかで位置づけている。「天体史の段階においては、物質は自己の形態をつぎからつぎへと無限に変化していく。生命の発生までは、この悪しき無限をくりかえしていた。生命が発生して、地殻は、自己の本質にかえる、反省する。外に生物が進化していくことは、地殻が自己の本質的な内容を実現していく過程として、生命の根拠へ反省したことである。生命は、地殻の本質である。しかし、この自然が、自己の本質への反省を、——自然の外的発展のその内的根拠への反省を、——生命的な必然性によってやるのではなく、これを意識的にやるというとき、人間の社会が発生する。人間は、労働過程において、技術をつうじて、自然の本質的な潜在力を現実化していくのである。」⁽¹¹⁾

このように、生物的世界においてこそ、自然は生命的となる。のみならず、自然は自己の胎内から人間を生み出すことよって、逆にいつて人間が自然の母胎から生れて、はじめて自覚するというのは、それが人間の働きかけをおして自分の本質をあらわにしていくことである。自然がこうして社会となる。ということはなにか。それは人間が労働する主体である、ということである。人間は労働の過程において、自然を掘りくずしこれて生活を営むのであるが、この過程は意識的におこなわれる。そして、自然は自己の本質的にもつて力を実現するということである。自然はこうして人間の労働をおして、その形態を変化させ発展していく。社会となった自然の本質は、したがって人間の労働であり、この労働を媒介としてのみ展開するのである。とすれば、梯哲学の論理の主体は、この社会となる自然と考えられはしまいだらうか。したがって、それは自然科学においてみられるように、空虚なもの・生命なきもの・静止せるものではなくて、それ自体で内容あるもの・生命をもつもの・動くものであり、哲学的自然であり、物質である。とすれば、梯哲学における主体性とは、こうした自

然なる実在が生きるものとしてつかまれることにほかならない。すなわち、それは単なる主観主義的なものではなく、「客体の主体」とでもいうべきものである。というよりは、むしろ、人間なる主体を包摂して動く客体であり、動くことよって単なる客観的実在から生命的主体となった客体であるという意味で、主体をふくむ客体であり、主体となった客体である。わたしは、梯哲学の基本的性格をこうした、主体・客体の弁証法と理解している。それのみではない。すでにのべたように、自然がこのように生命をもつのは、実はその根底に人間の生産的実践があるからである。すなわち、人間が主体的に自然に働きかけ、意識的に労働し、これによって自己の生活を営むからである。これは、すでに社会のロゴスであり、このロゴスを梯教授は『資本論』のうちにみるのである。したがって、人間の生命の営みたる労働過程が『資本論』の論理の中軸を占め、歴史を成立させる要素である。

「生産物の自由なる自己運動としての労働過程は、マルクスによって抽象的に『人類生活の永久的自然条件』とも規定されえたごとく、人間社会の全歴史的過程をいみするのであり、したがって、人間の生産的生活としての労働過程にこそ歴史が成立する、とされねばならない。」⁽¹²⁾というのも、人間が自然のうえで労働し、これを作りかえることよって、自然は生成し発展するとともに、人間もまた、そこでこそ、自然を自己の対象として意識し、動物と区別して人間の種属的実在であることを自覚するのである。動物は意識的に自然に対立しない、したがって生産しないが、「人間は自己の生活活動そのものを自己の意欲や意識の対象とする。人間の意識せる生活活動が人間をば直接に動物的な生活活動から区別せしめるのである。まさに、これによってのみ人間は一つの種属的実在である。」⁽¹³⁾しかも、この種属的な実在のあり方が、人間のばあい自由に意識的に製作することであって、これよって「自己の種属を対象化するのみならず、対象的な他者の種属を自己の本質として自覚する点で、

普遍的である。⁽¹⁴⁾こうして、自然はこの人間の活動を媒介として、自己の本質を自覚する、といえるであろう。とすれば、人間は労働においてこそ普遍的種属となるとともに、これを媒介として自然も歴史となるのである。

したがって、梯哲学では、『資本論』は、いうまでもなく、この労働過程を核心とするのであるが、実は『資本論』は人間が作り出す自然が、というよりは賃労働者の生み出す対象たる生産物が、商品となり、貨幣となり、資本となつて、その形態変化をとげながら、自己の存在を自覚し、深まつていく過程である。ここで、『資本論』は一つの学問的体系となるはずであり、この体系的ロゴスの自己展開が、上のことから生ずる梯哲学の個性である。すなわち、『資本論』の出発点は、なんら任意なものではなく、ヘーゲルのいうように全体系の展開を背おつており、根本的なものである。それは現実の全体的表象から下向して規定されたものであるが、その実在的カテゴリーは賃労働者が自己を商品として実践的に直観することなのである。『資本論』の端緒としての商品は、実は単なる生産物ではなく、賃労働者が自己の本質をそこに対象化しており、これを反省することにあるからである。そして、この基本的なカテゴリーなる商品が自己矛盾をもち、その自己矛盾によつて一步一步と自己の定在を具体化していく行程が、『資本論』の論理的展開であり、上向運動なのである。ちやうど、ヘーゲルが『精神現象学』のなかで、精神がその外在化である対象と対立しながら、これを認識する旅をつづけるように、マルクスは賃労働者がその定在形態たる経済的カテゴリーのなかで、自己の在り方を認識するのである。が、このことは、同時に賃労働者が客観的世界のなかで自らの実在をよく具体的につかみ、そして根底へ帰る、ことである。ここに、外に出るといふことが同時に内に帰るといふことの意味があり、このヘーゲルの前進即復帰がマルクスの『資本論』をも学的体系にしているといえるのである。

「かかる自己矛盾的な端緒の自己運動が、思惟の働らきとして円環的な体系をとる必然性にあることは、ヘーゲルのそれとまったく同一である。個別的な自己矛盾による苦悩の解決のために、その感性的実在性の全体に自らを対象的にかかわらしめるかぎりでは、自らの苦悩を、資本制社会そのものの客観的矛盾に根拠づけることができる。この根拠づけの一步一步が、『資本論』全三巻の演繹的にして総合的な上向叙述となっている。ところで、賃労働者が自らの実在を根拠にまで結びつけたときは、自らの直接性において資本制社会にたいする変革的世界観を自覚したときであり、即自且向自的な具体的一般者として、歴史的現実の主体的契機に転化するるのであるが、この歴史的自覚の論理は、始めから終りへの往路と同時的な、終りから始めへの帰路であり、ここにヘーゲル的な前進即復帰の円環的自己運動の学的体系性をみることができ⁽¹⁵⁾る。」このことは、先の全体的表象からエレメントまで下りていった下向運動と結びついて、『資本論』全体の総合的な円環となるのであり、基本的なマルクスの方法といえるであろう。

梯哲学の個性を以上でぎっとふれてみたが、もとよりその全体を尽くしたとはいえない。ここでは、ただわたしにだしている梯哲学の基本的な一部をえがければ、足りよう。つまり、賃労働者が概念的に商品から出発して一步一步と自己の定在を自覚する過程が、『資本論』の論理的過程そのものであり、その学問上の体系を構成しているものであるからには、われわれは外からマルクスの理論を眺めるのではなくて、マルクスの論理過程を追思惟しなければなるまい。というのも、実在そのものが一つの発展的構造をなしており、人間意識のうちにあらわれてくるのであり、それが動いているからである。だからこそ、追思惟される実在の論理構造は動くものであり、静止しているものではない。「このような自己実現の成果としての知識の組織、すなわち知識体系なるも

のは、一般につねに組みかえられつつあるものとして、動的に考えられねばならないのである。すなわち、それは、實在的対象の特殊な構造のうちから成立してきた過程そのものにおいて、すでに秩序づけられているところの動的な発展の体系であるべきであって、単に悟性的に規定された命題としての公理、法則から演繹されただけの理論、学説などの静的な知識体系であってはならない。」⁽¹⁶⁾

だとすれば、われわれは難解きわまるこの梯哲学にどこまでも食いついていかねばなるまい。そして途中で思惟を断念してはならないのであり、この物質の自己展開を梯哲学とともに、追思惟していくことが、まず第一に、梯哲学をとらえる道であろう。

(1) この論文は、梯教授選厝記念論文の編集委員会から原稿締切日の一週間前に急に要請されて、執筆したものである。依頼されたとき、準備不足のために、本論文集に収められている他の重厚な諸研究をけがし、ひいては梯教授に失礼にあたることを考えて辞退する決心をしていた。だが、この論文集の中で、直接に梯教授の思想に関する論文が少ないので、ぜひ執筆せよとの委員会の要請で筆をとったしだいである。かねて、梯教授に対していただいている筆者のイメーじと疑問点を素直に感想風につづることになるが、この論文集がこれによっていささかでも、同教授の記念論集になればと念ずるとともに、充分に練り重ねない論文となったことを、同教授ならびに他の執筆者に諒解していただきたい。なお、この論稿は先に『経済評論』誌、五月号で梯教授の「経済哲学原理」の書評を執筆したとき、紙数が限定されていたため、充分に展開できなかった論点を補足し、拡大する意味をもふくめていることを、付記しておく。

(2) ルカーチ「思想的自伝」岩波講座『現代思想』別巻三四九ページ。

(3) 教授のマルクスとの苦闘の過程は、『資本論への私の歩み』（現代思潮社、昭和三六年）に描かれている。なお、この点については、本書三一ページを参照。

(4) 『資本論の弁証法的根拠』一ページ。

(5) 同上書、四ページ。

「梯経済哲学」を生かすもの（平井）

- (6)(7)(8)(9) 同上書、三ページ。
- (10) マルクス『経済学・哲学手稿』「私有財産と共産主義」選集補卷四、三五四ページ。
- (11) 『資本論への私の歩み』一〇五ページ。
- (12) 『資本論の弁証法的根拠』七五ページ。
- (13) 『経済学・哲学手稿』選集補卷四、三〇六―七ページ。
- (14) 『資本論の弁証法的根拠』八一ページ。
- (15) 『資本論への私の歩み』二二九―四〇ページ。
- (16) 『ヘーゲル哲学と資本論』一六ページ。

二 『経済哲学原理』の立場

——賃労働者の範疇的把握——

わたしはこれまでで、梯哲学においては資本主義社会のなかで賃労働者が商品としての自己の定在を実践的に直視し、この表象から出発して自己の存在を経済的諸カテゴリーのなかで変化させながら、その変化を概念的にとらえることが、重要な問題であることをあきらかにしてきた。いうまでもなく、このばあい、ヘーゲル哲学それも向自有的論理が採用されて、自己の外在態を認識する過程が、同時にかれが自己の本質へと反省する道であることが、しめされる。とすれば、それは生きた人間の生命的な思惟作用の営みこそが、梯哲学の生命でもある。わたしが梯哲学を追思惟することの重要性をいうのも、この意味においてである。ところで、このように思惟過程によって実在のロゴスを追求することは、客観的にはなにを意味するであろうか。ことに、わが国の唯物論学界においては、この方向は戦後、主体的唯物論として脚光をあび、客観主義哲学への批判として大きい意義を

もつてきた。(もっとも、この主体性とは単なる主観主義ではなく、主体性をもつ客体であり、客体のうちにある主体性なのである。) ややもすれば、固定化し硬直するマルクス主義思想界にあって、流動的な思惟作用を駆使する梯哲学は、一陣の涼風とでもいうべきであろう。のみならず、広く国際的にも東欧に支配的な教条主義に対する批判および科学主義と結びつく客観主義への批判という意味をになうであろう。もとより、主体的唯物論といっても、これを国の内外についてみるとき、きわめて多様である——ことに、この立場の人々は個性的であるだけに、一義的に規定することはできない——から、そのなかでの梯哲学の個性をあきらかにしなければなるまい。だが、ここで詳しい評価に立ちいることはできない。ただ、むしろつぎの思惟の営みの結果として、この客観的立場が出てくるのだ、ということをしめすにとどめておこう。⁽¹⁾

ところで、わたしが、上のように梯哲学が人間の思惟作用を媒介とする實在のロゴスの自己展開をその方法的基礎としているといっても、それはいわば梯哲学の結果たる形態を語っているにすぎないのであり、それを再現するためには、具体的にそれを展開してみせるのでなければならぬ。わたしは弁証法とはこういう思惟過程の歩みそのものを、つまり實在の展開過程そのものをいうのであって、結論はその影にすぎないと考えている。したがって、梯哲学の全体系がいずれもこうした構成をとっていれば、そのうちのどの部分を切断しても、その論理の糸はたぐれるはずである。だが、わたしはここで『経済哲学原理』それも、『第二編、賃労働者の範疇的把握』について、この思惟過程そのものを追思惟してみよう。というのも、この論文が比較的新しい著者の労作であるのみならず、『経済学および哲学に関する手稿』を直接問題とするかぎり、著者の主体的論理の側面がよりあざやかに浮かび上がっているからである。事実、この論文は、すでにのべたところの、『資本論』の体系的

原理の客体としての商品を、その主体的担い手たる賃労働者に基づけて、この主体そのものの論理構造をうつし出しているのである。このことは、梯哲学を生かすものであるとともに、またその反面で、それのもつ問題性を投げかけているともいえる。では、どのようにか。

資本主義社会のなかで賃労働者が商品として自己疎外されているが、この姿はだれの目にも事実として承認されよう。これは国民経済学の出発点でもあった。「われわれは、国民経済学そのものから、それ自身のことばをもって、労働者が商品に、しかももつともみじめな商品に転落すること、労働者の窮乏はかれの生産の力と量とに反比例すること、競争の必然的な結果は少数者の手中での資本の蓄積、すなわちいつそうおそるべき独占の再現であること、最後に、資本家と地代生活者との区別も耕作農民と製造業労働者との区別もともに消滅して、全社会は有産者と無産の労働者という二階級に分裂せざるをえないことを、しめした。」⁽²⁾ところが、この賃労働と資本との対立について、国民経済学は資本家の利害を究極の根拠とみなすために、「展開すべきものをかくしこみ」そして「私有財産の法則を概念的に把握しない。」⁽³⁾マルクスがこの国民経済学の立場を克服しうるのは、なぜか。それは、この対立において自らが商品化されて人間の存在を否定されていることを直観する賃労働者の立場に立ち、この疎外された形から脱出するために、その疎外された本質をたずねようと努めるからにほかならない。この論理のプロセスが『経済学・哲学手稿』の論理の中心なのであるが、この実践的直観をばねとして動く論理をば、梯教授はヘーゲルの「定有からの向自有までの範疇的な自己展開の過程」に依拠して説明する。

四四年の手稿の核心であるこのヘーゲルの向自有の弁証法が、マルクスの賃労働の論理に具体化すれば、どのようになるのだろうか。「賃労働者はまず、その質的規定性において一個の商品となっており、したがって商品と

しての定有である。すなわち、向自有としての賃労働者の定有すなわち実在性は、一個の商品にすぎない。……向自有とは、質的規定性としての実在性、すなわち定有するものが、自己のうちに直接的に含んでいる否定性をあらわに定立したうえで、この定立された否定性の否定において実在性に復帰したところの定有であるとされてきた。したがって、労働者の資本制社会における質的規定性としての賃労働なる商品性が、賃労働者の実在性の契機である。そして、この実在性のうちに潜んでいて区別されねばならないという否定性は、いうまでもなく、賃労働者が人間であることにちがいないが、この否定性としての人間性が、商品としての実在性のもとに定立されて、そのうえで、この否定性の否定として、この人間性とその資本制社会における質的規定性としての商品という定有に復歸的に結びつくとき、商品という規定性において実在的である人間となる。これが向自有の論理であり、そしてまた、向自有的な賃労働者の論理構造にはかならない。とすれば、この向自有としての賃労働者の論理構造は、商品という実在性と人間という否定性との、区別における自己同一という関係にあることはあきらかであろう。⁽⁴⁾このヘーゲルの論理のヴェールをとりはらえば、つぎのようにいえる。賃労働者は、この社会では「人間商品」であって、商品としてのみ実在することができるのだ、がかれは同時に人間として自己の商品的定有を否定して、自らの姿を脱却しなければならない。こういう肯定性と否定性との矛盾こそ、弁証法の核心であり、この矛盾があるからこそ、またそれは自己展開することができるのである。

では、この「人間商品」または「商品人間」の向自有的な自己矛盾は、どのように展開するか。すなわち、それは自己が生みだした外在態を、自己の姿として認識する過程であり、「自己意識の作用」がそれである。もとより、これは『精神現象学』における自己意識の展開とおなじものではないことは、すでにあきらかにした。つ

まり、マルクスの唯物弁証法においては、一定の資本制社会という歴史的場所において、賃労働者が感性的に生きた物として自己の生命力の対象物と対立する現実的対立であって、その対立はまず交換過程においてあらわれる。まず、はじめに賃労働者は労働市場で自己の労働力を商品として資本家に譲渡する、ということが直接的なかれの在り方であろう。実は、最初の交換過程においては、生産物商品と商品との交換過程であるが、資本制社会ではこの他方の極に商品_、の_、産_、出_、者_、た_、る_、賃_、働_、者_、が_、立_、っ_、て_、い_、る_、ので_、あり_、、物_、と_、物_、と_、の_、関_、係_、は_、人_、格_、と_、人_、格_、と_、の_、表_、現_、と_、して_、と_、ら_、え_、ね_、ば_、な_、ら_、な_、い_、。そこにおいては賃労働者は、一つの自己矛盾におちいつている。というのも、「労働力の所有者が、それを商品として売るためには、かれは、それを自由に処分することができねばならぬ。つまり、自分の労働能力の、自己の人格の、自由な所有者でなければならぬ。かれと貨幣所有者とは、……法律上、平等な人格である。」⁽⁵⁾にもかかわらず、賃労働者はけっしてこの形式的な自由に甘んじることはいできない。もしそうなら、ヘーゲルのような観念上の所有の自由にとどまるであろう。現実には、賃労働者は生産手段から自由であるかぎり、生存するためには労働市場で自己の労働力を商品として資本家に譲渡せざるをえない、経済的非自由をおびているのである。こうした二つの側面こそ、流通過程における「商品人間」の自己矛盾した姿であった。

ところで、梯教授はこうした流通過程における「商品人間」の在り方を、さらにその根底にまで探求する。きわめて、興味深いことには、この段階における人間像は、生活手段を欲求する人間または欲望主体としてとらえられる。しかも、まえにふれておいたように、人間が欲求することにおいて、動物と同一であり、生命的なものであり、それ自体生物として一つの種属を構成する、というのである。もとより、労働する人間像との区別がひめられているのであるが、欲求を満足させる人間は、ヘーゲルの『法哲学』にも生き生きと描かれているもので

あり、經濟過程全体を問題とするかぎり、この指摘はたしかに注目すべきであろう。とともに、わたしは感性的人間が感性的自然を欲求する享受の論理は、フオイエルバッハの『哲学改革への提言』に、よりあざやかにしめされる、と考えている。「欲求のない生存は余計な生存である。欲求一般から自由なものは、またなんら生存の欲求をもたない。……窮迫のない本質は土台のない本質である。……受悩のない本質は、感性的でない、物質のない本質にはかならない。」⁽⁶⁾だが、この欲求する人間は、ただ自然に対して受動的な態度をとるものでしかない。唯物論的人間ではあれ、受動的であるかぎり、そこでは対象との緊張関係は抽象的なものにすぎない。梯教授が商品人間のうえに「単なる」という形容詞をつけているのは、この意味ではなかったか。

資本制の社会の流通過程においては、賃労働者は「単なる商品人間」としてあらわれるのであるが、この人間は欲望を満足する人間にすぎず、そこでは真に対象と緊張することはできない、そのかぎりかれは自己の対象との対決において自らの姿をつかむことはできない。そのためには、単なる商品人間が生産過程において行為し働らねばならない。労働においてのみ、真に人間は本来の自己を対象として自覚できるのである。というよりは、労働市場のなかで賃労働者が自己の労働力を商品として資本家に譲渡することが、すでに生産過程においてかれの労働力を働らせて剰余価値を生み出すことを前提しているのである。こうして、われわれが自己意識の弁証法にしたがってこの商品人間の矛盾を追求するとき、必然的に欲求する人間から「労働人間」へ推転せざるをえないであろう。しかも、このこともまた前節でのべたように、人間は労働する行為的主体となつてはじめて、動物と区別される人類として自らを確証できる。「賃労働者の行為的な自己限定なるものは、欲望の人間から自己の本質的な種属的生命へと否定的に自己関係する方向において、すなわち、労働としての行為的自己限定をなしう

る生産過程において、経済的に不自由でない本来的な自己を、自己のうちに対象化することでなければならぬ。いいかえれば、この本来的の自己を自己のうちにおいて自己そのものとみる自覚、すなわち、そのような向目的自己意識のことでなければならぬ。」

このようにして、賃労働者は資本制社会における生産過程のなかで「労働人間」としてあらわれるが、わたしは梯哲学の特性をこのように客観的な社会の変化にとまない主体がどのように形態変化をとげるかを、その段階ごとに分析している点にみとめるのであり、この弁証法を過程的であり場所的というのも、実はこうした思惟過程にあるとみるのである。問題はさらに深まり、ここから「疎外された労働」の有名な第一規定から第四規定までの弁証法論理の展開が始まるのである。というのも、梯哲学の基軸は、いうまでもなくこの労働の弁証法にあるのであって、そこにおいてこそ、労働における人間の本来的自由と資本制社会における労働の否定性との関係の論理がみられるとともに、また、抽象的規定からより具体的な現実的規定にまで展開する体系的方法がとられているのではなからうか。とすれば、『経済哲学原理』のなかでも、第二編それもこの第三章「単なる労働人間の論理構造」が、梯哲学のエレメントであるといえはしまいだらうか。

マルクスの「疎外された労働」は、マルクスの『経済学・哲学手稿』の核心である。現実における労働者は、この労働過程において動物と異って自由に意識的に対象に對することができるとはならずであるが、これが自己の生命の非現実化であるというのは、なぜか。この実現と非現実化との関係は、もつともエレメンタルな形態としては、第一規定である人間と自然との関係において、つまり労働者と生産物との関係の中で、自然は「労働がそこで実現され、そこで活動する」土台であるにもかかわらず、「感性的外界はかれの労働に属する対象、かれの労働

働の生活手段であることをますますやめる」点⁽⁸⁾にあらわれている。ところで、このように人間と自然とがたがいに疎遠になるということは、実はその間の媒介たる労働作用そのものが疎外されることであり、「疎外はたんに結果においてだけでなく、生産活動そのものの内部にあらわれる。」⁽⁹⁾というのも、「生産物はただ活動の、生産の要約であるにすぎない。だから、もしも労働の生産物が外在化であるならば、生産そのものは活動的外在化活動の外在化、外在化の活動でなければならない。」⁽¹⁰⁾この労働の作用そのものが労働者に外的であって、したがって労働は本来自己の生命の実現であり、肉体的精神的エネルギーの発現であるにもかかわらず、肉体や精神を荒廃させるであろう。ところが、これら二つの規定についていえることは、人間は自己の生命を労働によって対象化するとき、自己の本質を対象の中で自覚することができる、とともに資本主義的生産過程においては、「労働人間」は対象物との対立およびその労働そのものの否定性としてあらわれるということ、したがって、本来人間の種属的確立であるはずの労働が否定されていることは、人間が人間から疎外されていることになるであろう。こうして、第三規定が成立する。「疎外された労働は、人間から自然を疎外し、自己自身を、かれ自身の活動的機能を、かれの生活行為を疎外することによって、それは人間から類を疎外する。」⁽¹¹⁾

さらに、第三規定から直接に第四規定が引き出され、「人間の人間からの疎外」の論理が問題とされ、対立する二つの人格が賃労働者と資本家として相互の承認と対立との論理をうけとる過程が展開される。これがヘーゲルの自己意識の弁証法に依拠してきわめて生き生きと展開されているのも、興味あるものであるが、われわれはこれ以上この点について詳しくのべることは、ゆるされない。ここでは、以上の展開の中で、資本制社会における交換過程から生産過程へと、賃労働者の実存する場の変化にしたがって、その主体的形態が「商品人間」から

「労働人間」へと推転し、これがそれぞれ賃労働の実存の一部をあらわすものとして「単なる」という形容詞をうけとり、全体としての賃労働者の構造が総括されているのであった。

- (1) 現代のマルクス主義思想における著者の立場の位置づけは、『経済哲学原理』の序文に詳しく説かれている。
- (2)(3) マルクス『経済学・哲学手稿』選集補巻四、二九六ページ。
- (4) 『経済哲学原理』七二ページ。
- (5) 『資本論』青木文庫訳三二六ページ。
- (6) フォイエルバッハ『哲学改革の暫定的定言』岩波文庫版、二〇ページ。
- (7) 『経済哲学原理』一八五ページ。
- (8) 『経済学・哲学手稿』三〇一ページ。
- (9)(10) 同上書、三〇三ページ。
- (11) 同上書、三〇六ページ。

三 梯哲学の限界

——結合労働の欠如——

梯哲学の基本的性格は、およそ以上のようにみられよう。もともと、きわめて大きい体系だけに、これをその全体にわたって論ずることはできないし、以上の諸点にしても、わたしなりのイメージであって、ふれえなかつたものをすいぶん、残しているにちがいない。だが、梯哲学が『資本論』のなかで賃労働者の存在をその外在態において概念的にとらえる論理過程を探求し、ここに学的体系性を求めたのであり、しかも、『経済学・哲学手稿』について、賃労働者の主体的側面を解明した、しかも、そのばあいヘーゲルの定有から向自有への論理をマ

ルクス唯物弁証法に批判的に継承させて、これの「自己意識」の展開過程を追求したのである。そして、わたしは梯哲学を外がわからではなく、内がわからそれに密着して追思惟し、その形態をうかびあがらせたつもりである。このヘーゲルの「自己意識」の弁証法によって物質や資本の實在的論理を流動的に展開することが、梯哲学にマルクス主義思想のなかできわめて独自の地位をあたえており、したがってまたその積極的な意義もあるのだといえよう。だが、その反面にこの積極性またはこの独自性のなかに、はっきり限界もあるのであって、これを突きやぶることがなければ、梯哲学を乗りこえることはできない。というよりも、梯哲学を生かすためには、それがもつ限界をはっきりさせ、これを再び体系化することが、ぜひ必要であろう。いまここでわれわれは、この限界はなにかをあきらかにしよう。

それは、単的にいって、梯哲学にはマルクスの基本的な思想である「共同体論」が欠如しているということである。これは、梯教授の見のがしている重要な要素であって、これなしにはマルクスの理論を一面的にししかとらせることができなくなるであろう。いま、この面が梯哲学のどの面にあらわれているかといえれば、すでにみてきた「人類」という人間の類の本質についてのとらえ方である。梯教授はこの種属の本質を人間が動物とことなつて労働過程においてうけとる自己意識の作用としてのみとらえている。もっとも、この自覚過程または意識作用という側面はきわめて重要であり、この側面があるからこそ、人間が自己の生命活動を対象化し、これを意識していく自覚過程がでくるのである。「この意識的生命活動とは、意識的な生命的自己関係として、人間が、自己の生命活動ないし生活活動を、意識の対象とし、これを種属的な生命の無限性に止揚することをいみする。このいみで、それはさらに、自己意識ある生命活動ということができる。また、この理由からしてのみ、人間の活

動は自由となる。」⁽¹⁾しかも、このことは、動物にはなく、人間の固有の類的本質であり、しかも逆にこの人間の働らきをおして、自然はその普遍性をあらわにするのであった。このことは、『資本論』の労働過程のなかにも、はつきりよみとることができよう。

だが、人間の類的存在には、同時に「共同存在」という意味がある。人間が意識的存在であるということは、すでに他者との関係にあるということであり、ことに生産においてはそうである。人間はその類的本質において意識的に労働する、のみならず「一定の様式にたがって生産的に活動している一定の個々人は、一定の社会的・政治的諸関係を取り結ぶのである。」⁽²⁾人間の自覚過程についても種属の意識は「結合の意識」であり、「周囲の個々の人間との必然的な結合の意識、自分がともかく一個の社会のうちに生活しているのだという意識の端緒があらわれる。」⁽³⁾このことは、単なる労働から、さらに社会的分業にまで展開されるとき、きわめてはつきりするものであり、『ドイツ・イデオロギー』の生産力のカテゴリーがそれであろう。したがって、人間は自己の生活の生産の中で、二重の関係をとる。「そもそも生活の生産、すなわち、労働における自己の生産と生殖における他人の生活との生産は、それ自体で一つの二重の関係となつて、——一方では自然的な関係として、他方では社会的な関係として——あらわれる。」⁽⁴⁾この側面は、『経済学・哲学手稿』においては、また、表面にあらわれておらず、したがって梯哲学でも理論化されてはいない。もつとも、ポテンシャルな形態であらわれているものの、それが概念的につかまれているとはいえない。この側面は、しかもまた、『資本論』ことに労働過程論のなかにあらわれてくるが、梯教授は「労働過程の弁証法」においても、この点をのぞいている。

ところで、問題は、そのことによって生ずる結果はなにか、ということである。その一つは、マルクス思想が

主として疎外という視点で、くわしくいえば労働者の疎外およびその人間への回復という論理からつかまれて、その実現という契機が正しくとらえられない。梯哲学が否定性と同一性との矛盾としているその同一性についていえば、この労働者の実現という契機を、自由それに生産力の発展という形態でつかまえないければ、マルクスと空想的社会主義思想との対立が、うかび上がらない。人間は本質的に社会的動物であり、他者と共同して生産することにおいて自由であり、個人的限界から脱出でき、生産力を拡大することが出来る。この考え方はマルクスに一貫した基本的思想であつて、「結合労働」がこれである、とわたしは考えている。「結合された労働の作用は、個々別々の労働によつてはぜんぜんもたらされないか、はるかに長い時間をかけてのみもたらされるか、小規模でのみもたらされるかである。このばあいには問題なのは、協業による個別的生産力の増大ばかりではなく、即目的にも向目的にも集団力でなければならぬ生産力の創造である。」⁽⁵⁾われわれは、このことをはっきり協業のなかで確かめられる。そして協業のなかで個人は共同作用によつて集団力を構成するのみならず、個人が「この社会に接触することによつて競争心と活力の独自の興奮とが生み出される」というのである。こうして、「結合労働日の独自の生産力は、労働の社会的生産力または社会的労働の生産力である。これは協業そのものから発生する。労働者は他の労働者たちとの計画的協力において、かれの個人的諸制限を脱して、かれの種属能力を發展させる。」⁽⁶⁾とすれば、生産における共同において、本来プロレタリアートはその個人性を打破して集団力または結合力を増大させるはずであり、これこそ人類の本性なのである。もつとも、梯哲学でも、結合の考え方はある。たとえば、資本家と労働者との間の対立と結合の矛盾の論理がこれである。だが、そこには労働者相互の結合の論理はない。しかも、この結合によつて、プロレタリアートは本来、社会発展の原動力であり、その生産力を担

うものである。マルクスは労働過程でこうした結合力を正しく評価したうえで、ついでこの結合力を歪めるものはないか、というこの原因を資本主義的生産関係に求めたのであった。したがって、労働過程において自己意識的生産をおこなうことのみ、人間の類の本質をみるのは一面的であろう。他方で、共同生産による個人性の克服、さらにはそれによって人間の自覚が強化されることを問題であり、自由もマルクスではこの過程にみられるのではないか。

疎外は同時に自己実現であり、否定性と同時に肯定的であるという梯哲学には、この結合労働は生かざるべきであり、また生かすものである。資本制生産関係においては、この結合労働が同時に分裂労働となるはずである。マルクスは、資本主義的工場内部において、賃労働者のこの結合労働による自覚と団結力をみていたからこそ、この否定性をプロレタリアートに求めたのではないか。したがって、疎外からの回復は単に疎外された労働をその根拠において自覚するだけでは解決されない。実はこの自覚そのものにおいても、共同性が働いているのであり、この結合労働こそ自覚を實踐へ転化する要素なのである。そして、この点の欠如は、梯哲学をブルジョワ的自覚の論理という限界にとどめはしまいだろうか。わたしは、マルクスが『ヘーゲル法哲学批判序説』の中でプロレタリアートを社会革命の担い手とみたのは、実はこのことを先取していたからとみたい。というのも、資本主義的生産関係においても、日常的に工場制工場内部における賃労働者の共同性は、経験的に確かめることができるのである。しかも、ヘーゲル哲学のなかにも、この生産力の契機ははつきりつかまれている。資本主義社会は必然的であり進歩的なものである。これは人間の自覚をうながすからではなく、個人への解体をとおして再び諸個人の結合をうながし、社会的分業を展開させた。わたしは、本来マルクスの社会的なるもの

は、生産力であり同時に生産関係であつて、両者が結合しているものと考へている。

それだけではない。この社会的なるものの概念が欠如していることによつて、『ユダヤ人問題によつて』でマルクスが提起した、ブルジョワ革命からプロレタリア革命への継承の論理が正しくとらえられないことになる。梯哲学には社会発展の論理、したがつて資本主義と社会主義との媒介の論理が欠けてくるのである。また、マルクス主義の三源泉の一つであるフランス社会主義は通説としていわれているように、単にサン・シモンやブルードン批判ではない。むしろ、フランス革命やその革命思想からの継承が、具体的に問題として提起されねばならないであろう。しかも、フランス革命およびその思想との関係をとらえることによつて、ヘーゲルとマルクスとの思想的関係も、より一そう具体的となるだろう。こうして、マルクスの理論は、ある意味で社会思想の全体をせおつて出てくることも、同時にあきらかになるはずである。

最後に一言。これはいささか超越的な批判となるかもしれないが、哲学と経済学との関係についてである。梯教授は哲学と経済学との裂け目をうずめようと苦闘して、『資本論』の論理体系を追求してきたことは、みとめられよう。だが、これで、その間が埋まったかといへば、しかく容易なことではない。『資本論』を論理学として読むということは、その学的可能性を追求することであり、現実性との距離はかならずしも縮まるとはいえない。『資本論』は同時に経済学の古典であるし、経済理論としても、それは理論の可能性をあたえているのみで、ただちに今日の意味で現実性ではない。ことに、はっきり個別科学であり経験科学である経済学と哲学とは、はっきり区別されねばならない。ことに、専門化の傾向のはげしい現状では、経済学が一定の理論地平を仮定して、ここから理論を立てることは不可避である。だが、これを承認した上で個別科学がその基盤をたずねる領域

もありうると考えうるし、その意味で経済哲学の学的可能性が成立しうるのである。このばあい、哲学は経済学によってたえず批判検討されねばならぬし、逆の関係もなり立つ。いわば、両者の関係は梯哲学の言葉をかりれば、否定的媒介関係であろう。このことは、いうはやさしい。問題はいかに、これを展開するかである。

- (1) この点については、『経済哲学原理』第二編、第三章の展開が重要である。
- (2) 『ドイツ・イデオロギー』選集一卷、二二ページ。
- (3) 同上書、二八ページ。
- (4) 同上書、二六ページ。
- (5) 『資本論』青木文庫版第三分冊五四八ページ。
- (6) 同上書、五四九ページ。
- (7) 同上書、五五三ページ。

(三月五日)